HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オリヴィエ・レイ著, 池畑奈央子監訳『統計の歴史』(原書房, 2020年)
Author(s)	井上, 淳生
Citation	フロンティア農業経済研究, 24(1), 48-51
Issue Date	2021-11-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90253
Type	other
File Information	24(1)_06_Inoue.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

オリヴィエ・レイ 著
池畑 奈央子 監訳
『統計の歴史』

（原書房、2020年）

北海道地域農業研究所
井上　淳生

社会科学者の扱う重要なデータのひとつに、公的機関による統計がある。社会の趨勢を知るための基礎資料として、そして、研究者としてのオリジナルな知見を提出するための分析資料として、その恩恵は強調してもしすぎることはないだろう。多くの社会科学者にとって、これがなければ研究に大きな支障をきたす。統計とはこのような位置付けにあるといえる。

では、統計とは具体的にどのような性格のデータなのか。どのような来歴のもとに現在の私たちの目の前にあるのか。私たちが信頼を寄せるデータセットとしての統計は、どれほどの可能性あるいは制約を持ったものなのか。こうしたことを考えることも、社会を研究する者に課された仕事のひとつであろう。

本書は、いまや私たちの周りに当たり前に存在する統計、特に公的機関による統計の来し方を描いたものである。著者は、パリ第一大学で教鞭をとる哲学者であると同時に非線形偏微分方程式を専門とする数学者である。そして、複雑な事象を一般向けに分かりやすく伝えるエッセイストでもある。ウィリアム・ペティ（1623-87）やジャン＝バティスト・セイ（1767-1832）、エルンスト・エンゲル（1821-96）など、経済学を含む社会科学ではおなじみの先人たちの思考を縦横に紐解きながら、著者は「統計はなぜ、どのようにヨーロッパで飛躍的に発展したのか」という問いを考察する。

本書は、2016年にフランス語で公刊された *Quand le monde s'est fait nombre*（原意：世界が数になった時）の日本語訳であり、全９章から構成されている。以下で、内容を紹介しておきたい。

第１章「「数字」が支配する世界」では、健康状態を含め、現代は生に関するあらゆる事柄を数値で把握する時代であることを「自己定量化」という用語から説き起こしている。そのうえで、数字で世界を把握する試みの典型としての統計が、現代を生きる私たちの日常を「支配」するようになった理由を学際的な視点から考察することを宣言する。

第２章「統計の始まり」では、「国家運営の手段としての統計」という観点を代表に、今日に通じる統計の基礎が17～18世紀にかけて整備される過程が描かれる。旧約聖書に記された禁忌や、絶対王政との矛盾など、人口調査を実施することに対する宗教的、政治的障壁があった一方で、世界を知るための統計という考え方はフランスやドイツを含め、この時期に広くヨーロッパに浸透しつつあったという。

第３章「個人の社会」は、統計が発展した根本的な原因としての「個人の社会」の出現を扱っている。19世紀のヨーロッパで進行した農村における共同体の崩壊と都市化の進展のなかで、人びとは「すれ違う人は見知らぬ人ばかり」（ｐ.79）というそれまでとは全く新しい状況に遭遇する。世界の形、そして世界における自身の立ち位置が以前のように容易に確認できなくなった状況において、存在に関わる人びとの切迫したニーズに応答しえたものが統計だった。筆者はこのように強調する。

第４章「統計の爆発的な普及」では、「統計の世紀」とも称される19世紀において、国家が競うように統計学協会を発足させただけでなく、個人レベルでも統計の普及の取組みが行われていたことが指摘される。この間、統計に起きた重要な変化のひとつに視覚化の進展がある。それまで、文章形式を経て「表」という形で整理されていた統

計は、18世紀末には「曲線」、「円」、「柱」という形での提示方法が試みられている。19世紀には視覚化の流れは勢いを増し、提示方法は洗練され、色付き地図等の新たな形式を生み出していくこととなる。一方、統計の普及とともに、「何のために統計を記録し提示するのか」をめぐって、国益への寄与と学問的普遍性の追求という、相異なる２つの思惑が統計を覆うようになる。

第５章「社会問題」は、19世紀に統計が飛躍的に発展した背景のひとつとして、ある「社会問題」を取り上げている。貧困である。自然災害などで引き起こされるそれまでの一時的な貧困とは異なり、いわば慢性的な貧困である。その震源地としてのイギリスでは、構造的に固定された貧富の差が拡大していくさなかにあった。

この間、自由経済と社会経済をそれぞれ支持する知識人たちの間で、貧困の解決をめぐる議論の応酬があった。その主張の基礎として用いられたのが統計、特に人口に関する統計であった。状況はフランスでもほぼ同じであり、貧困者の実態を把握するために統計調査が行われ、その結果をもとに具体的な政策が立案されるという、現在に通じる政策と統計の関係が築かれ始めていた。とりわけ、社会経済を支持する立場、すなわち、資本主義を維持しながらも社会問題を解決しようという考え方の登場により、統計が実態把握のためのツールとして評価されるようになったのである。

第６章「統計と社会学」では、統計学の礎を築いたベルギーのアドルフ・ケトレー（1796-1874）が登場する。ケトレーの功績は、互いに異なる個々人の中に、統計を用いて規則性を見出した点にある。彼は大勢の人間の体格を計測するなかで、多種多様な人間の体格があたかも一つのモデル的身体を中心にするかのように、各身体がプラスかマイナスに乖離しているということを発見する。ケトレーはこのモデルを「平均人（*l'homme moyen*）」と名付け、社会は平均値へ集約されていくという未来予測を提出した。その後、社会に対する研究分野、すなわち社会学を統計を排除した形で確立しようとしたオーギュスト・コント（1798-1857）や、その反対に統計を駆使して「自殺」という社会現象に規則性を見出したエミール・デュルケーム（1858-1917）らの試行錯誤を経て、統計は社会学にとって必要な道具として位置付けられていく。

第７章「社会科学から自然科学」では、19世紀の末から統計が自然科学、特に生物学における遺伝研究と物理学における熱力学で応用される過程が描かれる。遺伝研究の分野では、人類学者のフランシス・ゴルトン（1822-1911）は、「平均」から大きく乖離する「並外れて才能のある個体」（p.189）に注目した。これは、「平均」に傾倒したケトレーとは対照的であった。彼は、統計を普遍性を抽出する資料としてではなく、各個体の特殊性を認める手段として位置付けたのである。

一方、熱力学の分野では、主に気体運動論への応用が図られた。膨大な数の分子によって構成される気体の振る舞いを理解するうえで、個々の要素（分子）への注目はあまりにも無謀であった。膨大な数を扱わなければならない状況を前にして、確率の考えを活用した統計は当時の物理学者たちに極めて信頼度の高い科学的知見を得るための道具として認知され始めるようになる。

社会を理解するという目的のために開始された統計は、政治・社会の分野から数学、生物学、物理学等を経由し、20世紀初頭になって経済学を含む社会科学へと還ってくることとなる。

第８章「統計に対峙する文学」では、統計とは異なる方法で社会の全貌をとらえようとした文学が取り上げられる。統計が飛躍的に発展した19世紀、フランスでは、勤め人や学生に始まり、女工、馬車の後部に控える従僕、酒飲み等、社会に生きる実に様々な人びとの生活（風俗）を観察し、記録するという「パノラマ文学」が興隆する。オノ

レ・ド・バルザック（1799-1850）を旗手のひとりとするこの分野は、統計と並ぶ社会の理解の仕方として一般大衆から大きな期待をもって受け入れられる。その後、両者は「互いに対抗しつつ補完し合うという一種の均衡」（p.255）を保つこととなる。しかし、文学を含む芸術で進行した前衛化、いわば承認欲求の先鋭化を通じて、19世紀末からの芸術は退屈なものとなり、社会の全貌を描くという任を統計に譲ることになるのである。

第9章「統計への愛憎」は、ここまでの考察をもとに、いまを生きる私たちと統計との関係についてまとめている。今日、webを介して大容量の情報を収集・処理することが可能になっており、統計が躍進する環境は整備され続けている。収入や将来性等に基づく職業ランキングを発表するwebサイトのなかには、「データ・サイエンティスト」と「統計学者（statistician）」がここしばらく不動の第1、2位を占め続けているものもある（careercast.com）。

これほどまでに統計が浸透した現在にあって、いまなお統計に対する警戒心が一掃されていない理由のひとつとして、筆者は、固有の存在でありたいと願う個人に対して、実は社会における「大勢の中の1人」に過ぎないことを思い出させるからというものを挙げる。体格差や経歴、趣味等の「個体差」こそあれ、数値として表現された各個人が集計可能かつ比較可能な1つのデータに帰されることへの嫌悪感がこの背景にあることが示唆されている。そのうえで、筆者は、統計を「目の前の世界に対する最適のアプローチ」（p.280）ととらえ、私たちが統計とどのような関係を築いていくかを考えていくべきであると結んでいる。

ここまで、本書の内容について紹介してきたが、本書が極めて広範な学問的射程をカバーする著作であることがお分かり頂けるだろう。

最後に、本書から導かれる論点のひとつについて指摘しておきたい。それは、統計というデータの説明能力を各個人がどのようにとらえるかという点である。これは本書の結びとも関連する。今日のコロナ禍の状況を把握するうえで、公的機関が提示するグラフは社会的に非常に大きな役割を果たしている。提示されたグラフを見て、「感染者数」の増減に一喜一憂し、時には微かに見える今後の見通しの明るさに安どする。圧倒的多数の専門外の人びとが直近の感染状況を把握し、その後の行動を組み立てていくうえで、統計はなくてはならないものとなっているのである。

このように、統計は私たちがいま生きている世界の輪郭となり、数値として示された輪郭に触れることを通して、私たちは自身の生きている世界とその中での自身の立ち位置を確認し、そして「安心」するのである。自由な個人の社会の到来と引き換えに、多くの人が抱えることになった「不安」を解消するための手段として、統計はいまも重用され続けている。

しかし、社会科学者は、この「安心」が実は条件付きであることを知っている。社会そのものを表しているものではなく、統計はあくまで社会を理解するための補助線に過ぎないことを知っている。だからこそ、多くの社会科学者は独自に個別の事例にあたり、現実を自身の身体で体感し、観察し、当事者から話を聞き、必要に応じて「自作」の統計をつくり、それらをもとに自説を展開するのである。

この点をめぐって、社会を対象とする研究における少なくとも2つの態度を見出すことができる。1つは、統計を社会を理解するための「外堀」と位置付け、「本丸」としての個別事例の内奥に分け入っていくという態度である。もう1つは、統計を加工の仕方によっては社会に関する新たな規則性を抽出しうる分析資料とみる態度である。

両者は互いに補完し合うものとして、そのつど設定される課題に応じて使い分けられるものであ

ろう。数あるデータのうちのひとつとして統計の持つ説明能力を見定め、課題に応答する過程でその説明能力の範囲内で活用する。統計とのこうした向き合い方を喚起した点こそ、本書が読者に教える学びである。

吉本　諭 著
『フードシステムの産業連関分析　北海道の食産業を考える』

（農林統計出版、2021年）

北海商科大学大学院
平出　　渉

1．本書の概要

本書は、経済分析方法の一つである産業連関分析を用いて、北海道の食産業の特徴と課題について論じたものである。著者は、経済産業省が公表している地域産業連関表及び地域間産業連関表を活用し、我が国や北海道における食産業の地域への貢献度や、北海道とその他都府県との供給構造について分析している。

2．本書の構成

本書は、6つの章と2つの補論により構成されている。

第1章　序論
第2章　フードシステムの生産額変動要因に関する産業連関分析
第3章　フードシステムの地域間産業連関分析
第4章　飲食費フローによるフードシステムの地域構造分析
第5章　全要素生産性からみた食品製造業の特徴と課題
第6章　要約と結論
補論1　北海道経済における食品製造業の位置付けと貢献度
補論2　食卓自給率の試算

3．本書の特徴

第1章「序論」では、問題意識、概念の定義、先行研究の成果と課題、そして本書の目的と構成